

長雨・日照不足

5月

水 稲

- 1 早生水稻は、徒長防止、分げつ促進のため、浅水管理する。移植後2週間を経過しているものについては、間断かん水する。
- 2 本田において葉いもちの発生を認めたら、早急に防除する。
- 3 育苗は、徒長しないように、温度や水管理に注意する。伏せ込み期間を長くしすぎないようにし、多かん水は避ける。

麦

- 1 雨水が停滞しているほ場では、適期収穫ができるよう排水に努める。
- 2 成熟期に達している麦は、刈り遅れによる品質低下を防ぐため、速やかに収穫を行う。ただし、高水分麦の収穫は脱穀時の衝撃による被害粒が発生しやすいため、収穫時の穀粒水分は30%以下とする。
- 3 麦が濡れている状態での収穫は避け、収穫後はできるだけ速やかに（4時間以内）カントリーへ搬入、あるいは乾燥作業に移れるように、乾燥能力に見合った収穫作業を行う。
- 4 倒伏、赤かび病、穂発芽などがみられる麦は、別収穫、別出荷を行う。

茶

長雨が続き、滞水すると根腐れが発生し、また、雨上がり後の晴天で「立枯れ病」が誘発されやすいので排水を徹底する。

野 菜

- 1 栽培中の場合、水が溝にたまった状態になると根腐れが発生しやすいので、排水を徹底する。露地栽培のほ場準備では、畝を高くするとともに、ほ場周りに排水溝、畝が30m以上になる場合は中溝をつくるなど排水対策を行う。
- 2 草勢が弱っているので、摘花や摘果等を行い、着果負担を軽減し、葉面散布剤を散布し、草勢回復に努める。
- 3 施設野菜は、長雨の後、晴天になると、急激な根の水分変化に対応できないため、極端な萎れや生長点、イチゴのランナーの先端の焼けが発生しやすくなる。萎れ部位、生長点、ランナー等の焼け防止のため、雨の日でも土壤水分を確認し乾燥しているようであれば、午前中に適量かん水を行うとともに、施設を閉め切らず、サイドや入り口を開放して風通しをよくし、多湿状態にならないように管理する。雨天後の晴天日は、早朝に適量のかん水を行うとともに、施設内の温度が急激に上昇しないよう、サイドや谷等を早朝から開放する。
- 4 風通しが悪いと病害が発生しやすいので、株元や重なっている葉の除去に努める。
- 5 べと病、灰色かび病、炭疽病等の病気が発生しやすい状態になっている。被害拡大防止のため、早期に病葉や病株を除去し、ほ場外へ搬出することが重要である。そして、雨の間の晴天日に、防除暦、防除指針に従い、適期防除に努める。雨天後は、葉茎等が軟らかく、葉害が発生しやすいので、基準内の薄い濃度（例：2,000～3,000倍の場合、3,000倍）で散布する等、注意して薬剤散布を行う。

果 樹・オリーブ

- 1 ミカン
日照不足により、生理落果が長引く可能性が考えられるので、着果状態を確認した後に摘果作業を行う。また、マルチ等により、園内の排水に努める。
- 2 モモ
過度な摘果は控え、段階的に行う。徒長枝等の整理を行い、着果枝への受光条件を良くする。

3 ブドウ

ハウス栽培では換気、排水に努め、園内の湿度低下を図り、病害の発生しにくい環境を維持する。

4 ナシ、カキ

生理落果のピークとなる時期である。長大になりそうな徒長枝のかき取り、剪除などを行い、樹体内の養分競合を起こさないように留意する。

5 キウイフルーツ

摘果段階の果実は、病虫害被害を確認して摘果する。

6 下記の病害が発生しやすくなるので、必要に応じて防除を行う。

柑橘類……………黒点病、かいよう病（中晩柑）

カキ……………炭疽病

ブドウ……………べと病、灰色かび病

キウイフルーツ…果実軟腐病、灰色かび病

モモ……………せん孔細菌病

オリーブ……………炭疽病

※ 防除はいずれも、農薬のラベルに記載されている使用方法を遵守すること。

花き

1 施設花き

1) 施設周りの排水に努め、内部へ雨水の浸入を防ぐ。

2) 換気を十分に行うとともに、雨天時には、換気扇による換気、温風暖房機による間断送風等を強制的に行う。

3) かん水は必要最小限に止め、こまめに行う。また、株元にかん水し、植物体にかけないようにする。

4) 薬剤防除はできる限り燻煙、煙霧等を利用し、噴霧器による薬液散布は、必要最小限に止め、薬剤散布を行う場合は、施設を閉めるまでに薬液が乾くようにする。

5) 生育や商品価値に支障がない限り、下葉や余分な枝は除去して、通風と採光をよくする。

6) 病害は発生している部分は早めに除去し、直ちに施設外へ搬出して焼却処分する。

7) 寡日照が続く中での晴天は、強日射や急激な温度上昇により、葉焼けや萎凋等を起こしやすいので、換気等により高温を防止する。

2 露地花き

1) ほ場の周囲に排水溝を設け、畝間の停滞水が速やかに排水できるようにする。

2) 根の活力低下、多湿により病害が発生しやすいので、雨天の間隙をぬって薬剤散布を行う。

3) 湿害により根の活性が低下して養分吸収力が弱くなり、草勢低下や生育遅延するので、500～1,000倍程度の液肥を葉面散布する。また、肥料が流亡するので、速効性肥肥料を施用して草勢の回復を図る（硫安 5kg/10a）。

3 キク

1) 黒斑病、褐斑病、白さび病等の病害が多発する恐れがあるので、下葉を除去する等して通風をよくするとともに、薬剤防除を徹底する。

2) 親株ほ場は、できる限りビニール等で雨除けするとともに、白さび病等の防除を徹底し、健全苗を確保する。

3) 電照中のものは、電照時間を通常より2～3時間程度長めにする。

4) ほ場条件などから定植遅れが予想される時は、過湿土壌に無理して植えることなく、適湿土壌になってから植える。なお、苗が老化した場合は、できる限り、新たに育苗した適齢苗を使用する。（作型の変更も考慮）

畜産

1 湿度が高くなっているため、配合飼料及び乾草などの粗飼料のカビに気を付ける。カビのあるものは給与しない。また、雨に濡れた水分の多い青刈り飼料は下痢や鼓張症の原因となるため

与えない。

- 2 飼槽内の残飼が変敗しやすくなっているため、残飼の除去など、飼槽の清潔を保つよう努める。
- 3 畜舎内の湿度が上がっていれば、気温が低くても、家畜の体表面からの体温放出がうまくいかなく、暑熱ストレスを受けやすくなっているため、畜舎の換気（強制換気も取り入れる）を良くし、暑熱ストレスによる家畜の損耗軽減に努める。

飼料作物

飼料作物 今後、長雨となれば湿害による生育不良を軽減するため、ほ場に排水路を整備して排水に努める。特にトウモロコシでは重要となる。また、牧草類では生育ステージも考慮に入れて収穫し、再生草の刈取 時期・回数を調整して収量を確保する。